

阿部知二(1903-73)の『北京』は1938年4月に刊行された。それに先立ち37年には「燕京」が『文芸』1月号に、また『文壇』5月号には「北平の女」が発表されている。一連の創作の背景には1935年の9月1日から13日までの2週間ほどの滞在経験がある。その間、関東軍の仕掛けた盧溝橋事件(1937.7.7.)の勃発に伴い、北京は日本軍により占領される。時局は急速に流動していた。舞台となった都市の呼称の移り変わりにも、その投影は認められる。戦国時代から「燕京」と呼ばれてきたこの都市は、明に至って「北京」と改称されたが、1928年に中華民国の首都が南京に移るとともに、「北平」と改称され、さらに1937年10月13日、日本軍の支持を得た臨時「傀儡」政府により、再度「北京」と呼ばれるに至ったからだ。

小説刊行時に付された跋には、「この小説は時局的な文章ではない」とある。ここに、35年秋に時代設定された作品と、それを刊行した時点との落差のみならず、時局とは距離を取ろうとする筆者の保身、あるいは

「燕京・北平・北京」阿部友二の描いた「東洋の故郷」『図書新聞』2718号、2005年3月15日

は消極的抵抗の証、あるいは一種の自責を伴った翰晦を認める説がなされてきた。だが果たしてそれで充分だったろうか。

北京の首都師範大学で教鞭を執る王成助教授の「阿部知二が描いた『北京』」は、前田愛の衣鉢を継いでこの小説の都市空間構造を解明した出色の論文だろう。それに加えていまひとつ大きな成果は、阿部の分身とも言うべき主人公、大門勇と交友を持つ中国人インテリ、王子明のモデルを説得性ある議論で特定したことだ。従来、虚構性の強い人物とのみ指摘されてきたこの青年は、実際にはふたりの実在の人物を合成して造形されている。ひとり周作人の息子、周豊一。北京大学で日本文学を研究していた、当時23歳の豊一が阿部を訪ねてきたことは『北京雑記』に確認できる。作中のふたりが訪ねる先輩のW教授は「頭を刺つた、仏僧のやうな感じのする」人物とあり、ここには阿部の面会した周作人(1885-1966)の面影が濃厚に漂っている。

阿部知二の『北京』に登場する英語の達者な青年知

識人、王子明には、加えて林語堂(1895-1976)の姿が投影されている、と王成氏は推定する。38年に阿部は『東京日日新聞』に「林語堂の『支那』」を掲載している。林の*The Importance of Living*(1937)には、日本人との比較で中国人にはVisionがないのが欠点とする議論が見えるが、これはそのまま『北京』での王子明の発言に応用される。その一方で阿部は、林が上海で36年に英文で出版した*A History of the Press and Public Opinion in China*を参照し、中国が容易に日本の支配に屈するような社会ではないことに警告を発している。中国知識人の「抗日」運動の発端は『北京』にも描かれているが、その淵源も林語堂の著作にあった。

さらに林語堂の「古都北平」には、南京との比較において、北京はちょうど東京に対する京都に類比すべき古都、とある。この「古都北平」が訳出・掲載された『改造』1937年11月号は「支那事変増刊号」。阿部の寄稿も見える。そこで王成氏はこう推測する。「古都北平」の訳者名は明記されていないが、状況からし

て、この文章を選び訳出の労を取ったのは、阿部知二その人ではなかったか、と。

ここには、「時局下」にニューヨークに脱出し、抗日的な文章を公にしていた林語堂の動向を熟知しつつ、敢えてその作家の感傷的な古都喪失の心情を込めた文章を掲載した、阿部知二という作家の秘められた意図が見え隠れする。これは、一見「時局」とは無縁のみにみる「感傷紀行録」の「幻想曲」を「やや遠慮しながらの支那観察記」という体裁で刊行したという、『北京』の屈曲した自己規定とも、無縁ではあるまい。

小説の後半に登場する鴻妹との淡い退廃の恋情は、北京を美女に喩える修辞を踏んでいる。そこに支配の対象を女性として表象するという、度し難い植民地主義的心理の定型を指摘することは容易だろう。だがその女性を支配不可能な「花」として審美的に描いたところに、阿部の「遠慮」があった、また知識人の限界を露呈する自己懲罰の姿勢、さらには作家という職業の限界に対する醒めた自覚を見定める必要もあろう。

小説の終局で、大門は日

本人大陸浪人青年の失踪事件に巻き込まれる。探索のため外城の町外れの貧民窟に入り込んだ主人公は、その夜、前門外の高級歓楽街で時を過ごし、結局予定していた天津行きの列車に乗り損なう。「時間は流れることをやめたやうであった。」この一件のあと、主人公は王子明に連れられてW教授宅を訪れる。そこで、故宮博物館に安置された清朝の動向を熟知した者が、時刻を刻む機械の役を果たさなかったという話題が提供された。時間性が「進歩」の符丁なら、中国は不動・不変の永遠の象徴となる。満鉄は世界で最も時刻に厳密な運行を自慢するが、はたしてその満鉄が、不変の空間たる中国を支配する日が来るのだろうか。議論はそこで打ち切られる。だが、「悠々たる北平の空気の中」、中国の底辺にわずかに接して主人公が迂闊にも関した遅刻の失態は、日本に託された「進歩」の敗北を言葉外に物語っていたはずだ。

\*王成『阿部知二が描いた『北京』』第165回日文研フォーラム報告書 国際日本文化研究センター刊 2014

燕京・北平・北京  
阿部知二の描いた「東洋の故郷」

2005-03.19  
H. 27.18

国際日本文化研究センター  
総合研究センター  
大学院 大学 教授  
稲賀繁美